第III章　調　査　経　過

1　概　　要

今回報告する発掘調査は，特別史跡「平城宮跡」の一部，奈良市佐紀町字寺前の地で行われたもので，5ヵ年計画による継続調査として，昭和34年度より開始された。　6ABO区

調査が行われた 6ABO 区は，この南に接する東大宮の地と合わせて，前述のように，関野貞によつて，内裏跡と推定されており，宮城内でもかなり重要な位置を占めている。この地域は通称一条通りと佐紀町に挾まれる南北 80 m 東西 210 m ほどの水田地帯で，西は佐紀池に接し，区域南端は一条通りに沿つて東西に住宅が並び，北端は道路および灌漑用水路で限られる。中央を南北に通る道が，ほぼ宮域全体の中心線と一致し，6ABO 区はこの道によつて東西の2地区に分けられる。両地区の地形はやや異なり，東半地域がほぼ平坦な水田の連続であるのに対して，西半地域は水田一筆ごとに段があり，東から西に進むにつれて，順次低くなる。地形を隣接地との関係でみると，北に接する 6ABN 区は 6ABO 区より全体として一段高まつており，南の 6ABP 区は 6ABO 区とほぼ似た状況にある。

6ABO 区の発掘に当つては，遺構の所在を全く予見することができず，また小範囲の調査ではその性格を明らかにすることが到底不可能なので，毎次少なくとも 30 a を全面にわたつて発掘する計画を立てた。発掘期間については，発掘に就労する人夫の確保に地元農家の協力を必要とするので，農繁期を避け夏冬の2回が計画された。発掘作業の進行には排水の便が大切であり，調査は佐紀池に接する地区より漸次東進することになつた。

昭和34年度は，同年春に飛鳥板蓋宮の発掘調査をおこなつたため，経費の上から夏期の調査のみに限られた。この第2次調査では 6ABO 区 N～W 地区を発掘した。最初の発掘でもあつたため，遺構の検出に至るまで長時日をついやし，実測を終えて埋め戻し開始までにほぼ90日を要した。発見した主な遺構は，掘立柱建物8棟・溝6条・掘立柱柵2列・池1所・遺物の堆積した土壙数所などであり，それぞれの重複関係を検討して，これらが前後7回にわたつて造営されたものと認められた。さらに 6ABN－V 地区も一部を発掘したが，遺構は検出されなかつた。この第2次調査の結果，遺物が多数出土し，その整理と保管のための場所が必要となり，それに加えてその後の調査は年間を通じてほとんど継続されるため，現地に調査事務所が建設されることになつた。　昭和34年度調査

昭和35年度には，春・夏・冬3回の調査を行つた。春の第3次調査は事務所建設予定地の事前調査として，国有地東北隅の 6AAQ－A 地区で始められた。発見遺構は掘立柱建物3棟と築地回廊である。この築地回廊は昭和29年冬，一条通り改修工事の際発見された遺構と一連のものと判断され，古図に示される平安宮内裏の回廊と構造・規模が近似するので，この築地回廊でかこまれた地区を第2次内裏跡と推定するに至つた (PLAN 1)。　昭和35年度調査

夏の第4次調査は第2次調査地の東に隣接する 6ABO 区 K～M 地区で行われ，これで 6ABO

区西半地域の調査は終了した。あらたに発見した遺構は掘立柱建物9棟・溝1条・井戸1所・池1所・遺物出土の土壙数カ所で，これらは8期にわたつて造営されたと認められた。これを第2次調査の結果と対比検討して，6ABO 区西半部においては10期の造営があつたと考えられた。冬の第5次調査は6ABO 区の北部西半のA～C 地区一部とI地区で行つた。新しく発見した遺構は掘立柱建物9棟・掘立柱柵1列・遺物を含む土壙数所で，このうち1土壙より41点の木簡が出土した。木簡には宝字5・6年の銘をもつたものもあつて，遺構や遺物の実年代を決める手がかりとなり，また記載の内容によつて，この地区にあつた官衙の名称をも想定し得るに至つた。その点で，この発掘の成果は劃期的なものといえよう。また柵の発見と隣接する地区の遺構や遺物の出土状況から6ABO 区中央に道路の存在が推定され，官衙群の区劃が考えられるようになつた。

昭和36年度調査

昭和36年度の調査は前年度同様春・夏・冬の3回行つた。春の第6次調査は6AAQ-A・C 地区と6ABO－J 地区で行つた。前者は遺物保管倉庫建設予定地の調査で，事務所西隣りを発掘した。発見遺構は築地回廊に取付き内裏中心南部を画す掘立柱回廊の一部と5列の掘立柱列である。第3次調査とこの調査と合わせてもこの地区の発掘面積は広いものとはいえないが，発見遺構は全く想像もできなかつたもので，この地区の遺跡の重要さを改めて認識させるに至つた。6ABO－J 地区の発掘は，第5次調査終了のI地区と同一の水田の南半部で，排水の便を考え夏季の調査に先立つて行つたが，掘立柱建物1棟と曲折する石敷溝1条，遺物出土の土壙等が発見された。

ついで夏の第7次調査では，6ABO 区東半地域の南部 D・F・G 地区を発掘して，掘立柱建物15棟・掘立柱柵1列・井戸2所を発見した。このうち建物には身舎の梁間3間のものや，側柱通りの柱間3間分を開放にしたものなど，異例の規模のものがあつた。井戸からは平城上皇時代の平城宮に関連すると思われる遺物を検出し，平安時代の平城宮を遺跡の上ではじめて確認した。また6ABN－M 地区の一部を，史跡地現状変更の申請にもとづく事前調査として発掘した。この地区では遺構は検出されず，柵は北に延長しないことが判明した。なお，現在第8次調査が，6ABO区A～C 地区において行われつつある。

現在までに行われた発掘調査の概要は，以上のとおりであるが，今回の報告では主として昭和34・35両年度の6ABO 区の調査の結果を収め36年度の第6次調査の一部もこれと密接な関係があるので一括した。各調査地域の発掘期間と面積は Tab. 1のとおりである。

調査方法と作業能率

これらの調査を通じた発掘方法として，発掘開始に先立ち遺構遺物の出土地点標記のため3m方眼で地区を設定し，各水田毎に9～12m の間隔で土層観察用の畦畔を残し，そのほかは全面にわたつて掘り下げた。

調査面積は当然経費に制約されるが，他方全面発掘するので排土の集積場所にも影響された。また発掘作業は，水田耕土・床土・各盛土層を順次平面的に反復して掘り下げる方法をとつたので，作業能率は専ら排土の運搬に左右された。排土の運搬法として試みたのは，ブルドーザー，ベルトコンベーアー，ト

Tab. 1　調査期間と発掘面積

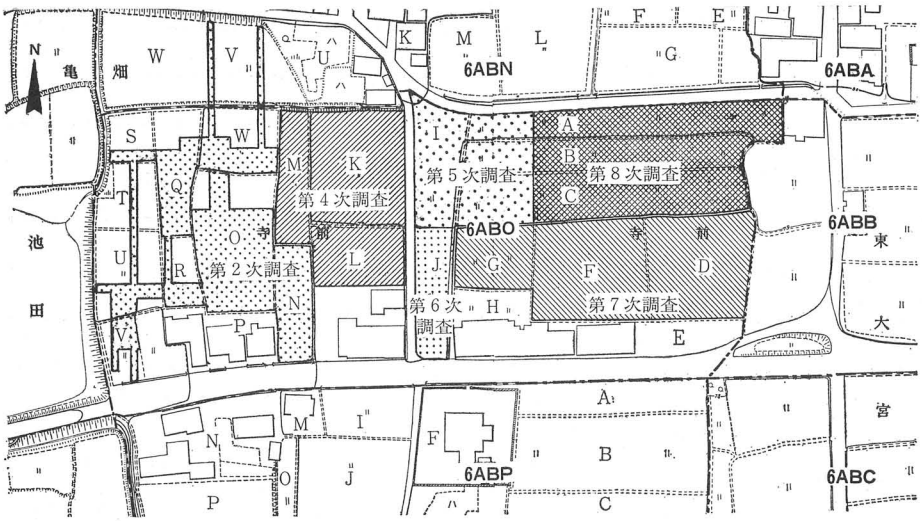
6ABO 区	調　査　期　間	実労日数	調査面積
第2次調査	34. 7. 17～34. 12. 20	133	29.7 a
第4次調査	35. 7. 11～35. 10. 20	88	27.0
第5次調査	35.11. 21～36. 3. 10	79	13.4
第6次調査	36. 4. 1～36. 6. 15	39	5.9

Tab. 2　1a当りの所要人員

人/a	全期間	耕土除去	埋戻し
第2次調査	83.4人	——	24.2人
第4次調査	75.5	1.2	24.8
第5次調査	73.7	0.8	33.5
第6次調査	70.8	1.0	21.3
第7次調査	——	0.8	——

※ 第2次の耕土除去はブルドーザー使用のため除外した

Fig. 1　6ABO 区地区割および発掘経過指示図



ロッコの機械の導入であるが，ブルドーザーは遺跡破壊の難点があり，トコッコ敷設には地層観察のために残す畦畔が障害になつた。そのため現在ではベルトコンベーアーを使用している。

各調査の発掘作業人員の 1a 当りの比率は Tab. 2 のとおりである。これには遺物整理等の人員は含まれていない。但し，第5次埋戻しには，土壙発掘の人員が重複している。

2 発 掘 経 過

A 第 2 次 調 査

第2次発掘調査は 6ABO 区における最初の発掘であり，当然遺構の所在，埋没状況は予測できなかつた。そこで調査方針としては，調査地全域にわたつてトレンチを設け，その知見にもとずいて発掘を拡大していくことにした。このうちM・N 地区は南北に細長く続く水田であつて，この地形は遺跡と関連するものでないかと考えられ，さらに前年の 6ABP－I 地区の検出遺構とどのように関連するかも問題であつた。そこでN地区については当初から全面発掘することに決した。また S～V 地区は関野貞が推定した内裏跡の西端であり，東端の 6ABP－A 地区に前年の発掘で発見された土塁がこの地区にも対称的に存在することが予想されたので，V地区も全面発掘する予定であつた。　調査計画

まず調査地各地区を通るように，東西方向に 2，南北方向に6のトレンチを設けた。遺跡全般の傾向としては，水田床土下に人工的な盛土層がみられたが，この層は南西に進むにつれて厚さをます。そして東北では地山が高くなり，6ABN－V 地区は水田床土の下は直接地山であつた。　トレンチ調査

トレンチではじめて発見した遺構は，W地区南部の SA 121 掘立柱列北端の柱穴である。当初は盛土層上でやや異る土質のものとして認められ，掘立柱掘りかた（以下柱穴と略記する）の輪郭は不明瞭であつたが，この地区の盛土層がごく薄く，すぐに地山になつたので地山まで削り下げ，柱穴輪郭を確認することができた。結果的にみればこのトレンチは偶然 SA 121 の掘立柱列と同位置にあつて，当然南のO地区でも柱穴を発見しえた筈だが，トレンチ内にところどころ異質土を認めても，明確に柱穴と決定することができなかつた。O地区北西部では，土器片が混入する異質土

を広範囲に認めたのでトレンチを拡げ，多量の土器が埋没したSK 140の土壙を発見した。またV地区南部は北から掘り拡げ，東西方向の2条の溝を発見した。溝の西南は佐紀池に続いて地盤が低下し，当初予想した南北方向の土塁がないことを確認した。南端は近世の厚い推積を認めたので掘り拡げなかつた。上記のようにトレンチ調査で遺構検出面が判明したので，最初に予定したN・V地区とともに，検出面が高くて，遺構が存在しそうなO・W地区を全面発掘することにした。W地区ではSA 121の柱穴を手掛りに，この検出面を拡げて他の遺構を探索したが発見できず，更に掘り下げてSB 143建物の東半と，SA 120掘立柱列の柱穴を発見した。

全面調査　N・O両地区では，発掘作業の能率化のため，ブルドーザーを使用して耕土を除去したが，機械の性質上，耕土と床土が攪乱され，畦畔も大部分破壊されたため，水田所有者の要望により使用を中止し，床土排土遺構検出作業はトロッコによらざるをえなかつた。床土の下の含礫茶褐色土面は，ブルドーザーのキャタピラの攪乱で凹凸になつたところもあつたが，ほぼ平坦であつた。この最初の土層面からは，北から続くSA 121掘立柱列の南半や凝灰岩の埋没されたSK 137・138の土壙を発見したのみである。その後，降雨に備えて東西に排水溝を掘つたところ，偶然含礫茶褐色土下からSB 116の柱穴を検出し，さらに南北にもトレンチをいれてみると含礫茶褐色土下に古い旧地表面があつて，それに遺構が伴つていることが判明した。そこで，第2回目の検出作業に移り，含礫茶褐色土を削りとり，SB 112～SB 145の諸遺構の柱穴を漸く検出しはじめた。これらのうちSB 116建物の柱穴は他のものと重複することが多く，その重複状況から各建物の造営時期の先後関係を判定しえた。柱穴が掘られているこの土層は，上層の含礫茶褐色土と同様整地盛土による人工的なもので，柱穴の埋土も同質の土であつた。そのため，一部の地区では4回に及ぶ削り下げの結果，漸く柱穴輪郭を明確にすることができた。したがつてこれらの柱穴輪郭は，結果的にみれば当然SD 130の石敷と同じ高さで検出しえた筈であつたが，実際は更にその下まで削り下げて確認できた。特にSB 112・113建物の柱穴の識別はきわめて困難であつて，ほとんど発掘終了間際に発見できたような状況であつた。

遺構追求　N地区南部では，上層の含礫茶褐色土面から，SD 108・SA 109の溝を発見した。SD 108の溝底下では木炭の散乱面を検出し，この面から埋没された礎石を発見した。一方調査地西南では，O地区で検出したSB 131建物を西に追求してR・U地区のトレンチを掘り拡げた。U地区では含礫茶褐色土層下の盛土からSB 131建物と並ぶ同規模のSB 145と，それに重複するSB 146建物の南妻を発見した。SB 146は西側柱を北へ追求して北妻を検出し規模が判明したので，排土盛土下に想定される東側柱列の検出は行わなかつた。これと前後してW地区発見のSB 143を西に追求してQ地区を掘りひろげ，その西半部の柱穴を検出し，その南側柱列をS地区北部で追求して，桁行13間になることを知つた。Q地区南半では，上層の含礫茶褐色土面に掘られた南北幅60cmの溝状遺構に，多数の瓦が堆積しているのを検出したが下層からは遺構を発見しなかつた。

地層調査　調査地北端の6ABN－V地区は2本のトレンチをいれたが，なんらの遺構をも発見せず，地山が6ABO区より高くなることを知つた。またT・U地区のトレンチ内では遺構を認めず問題がなかつたので，発掘期間の関係上掘り拡げるに至らなかつた。地層調査は，主として各遺構の柱穴壁面で検討し，地山が西南にかけて低下し，その上に2回に盛土整地した盛土層があることを確認した。N地区南端では地層調査のトレンチ内で，現在の一条通北側溝に接してSD 106の溝と，それを埋めてその上に築成したSA 105の土塁を発見した。またSA 121の掘立柱穴底では，腐植土

とその中に密生した草本植物の茎が検出され，盛土整地前に地山が低いこの地域は，池状の湿地であつたものと推測された。

発見遺構の造営時期の先後は，遺構検出面の層序や重複状況で決定され，重複しない建物は配置関係や柱間寸法の異同などをもとにしてまとめられて，次のA～Gの7群に分類された。*

A： SD 130,　B： SB 112・131・143・145,　C： SB 113・135,　D： SB 116,
E： SA 120,　F： SA 121,　G： SA 109・SK 137～140

B 第 4 次 調 査

第2次調査の結果，遺構がこの地区のほぼ全域にわたつて存在すると予測されたので地層観察のために畦を 9～12 m 間隔に縦横に残すのみで，最初から全面発掘にとりかかつた。 全面調査

まず調査地を南北に2分し，それぞれ東南より併行して掘りさげ，順次柱穴を検出して13棟の建物遺構を発見した。遺構の検出に当つては，盛土整地層上では一般に柱穴の輪郭は判然とせず，結局地山層まで削つて確認したものが多い。地山は SD 126 以北は礫質であつて，順次南へ粘土質，礫質と互層に変化していた。発掘地中央部は，丁度礫質層に相当し，盛土層との違いが判然とせず SB 176 の南妻附近の柱穴の検出は特に困難であつた。SB 176 と SB 177 の柱穴を検出してその重複状況を調査中，地山に掘られた SD 141 の溝を発見し，これがこの地区で最も古い遺構であると認められた。建物以外の遺構としては地区中央部で径 5 m の壙を検出し，一部を掘り下げたところ井戸枠木材が出土し SE 168 を発見した。しかし井戸の掘り下げは，掘りかた埋土の運搬処理上一時中止して，遺跡全面の撮影実測後に行うことにした。またK地区中央部でも遺物を含む大きな壙 SG 180 を検出した。この壙の埋土は底部に近くなると有機質を多く含む泥土となり，また，壙周辺の SB 141・177・194 の建物は意識的に壙を避けて造営されているようで，これらの建物と共存する池であつたと考えられた。SG 180 の北では東西に走る SD 126 の溝を発見し，掘り下げて底が2重にあることを認め，溝が2時期にわたることを確認した。第2次調査に SB 143 の北で検出した溝はこの延長部に当る。なお SD 126 の中央には，重複して中世の井戸があつた。

発掘地西南では，盛土整地層が上下に2層検出されて，第2次調査で発見した SD 130 の石敷は，下層の盛土層上に設けられ東に続いているのを再確認した。下層の盛土層は西に進むに従つて厚くなるが，第2次調査と同様にこの層で柱穴の輪郭を明確にするのは容易でなく，やや削り下げてようやく判然と検出された。実測終了後井戸の発掘を再開し，はじめに4隅に柱を立てて方1 m ほどに組んだ井戸 SE 168－C を発見したが，さらにその下から，番付墨書された井戸枠を方 2 m の井籠状に組む大井戸 SE 168－A を発見した。Aの井戸は底をさらつたらしく遺物がなかつたが，Cの井戸の底では平安前期以後に属する土器片が出土した。なお，上の井戸を B・C の2時期のものとしたのは井戸隅柱が2種あつたためである。

地層調査では，盛土整地層を3層確認した。最初の盛土整地層は調査地の東北部にのみあつて，南西には認められなかつた。第Ⅱ期盛土はほぼ全域に認められ，第Ⅲ期盛土は南西部にのみあつた。 地層調査

発見された遺構は，第2次調査と同様，柱穴の重複によつて造営の先後を決定できるものを基準とし，検出面の層序や配置上の類似を考慮して，8時期に分けられた。この中第2次調査のA群に属していた SA 130 の石敷は，第4次調査地の第Ⅱ期盛土層上で検出され，第2・4次両調査を比

＊ この分類は「昭和34年平城宮跡第2次発掘調査概要」（奈文研年報1960）に使用した。

較関連させる基準となつた。以上の結果，新しく第Ⅰ期の盛土層上に造営された2群と，それ以前の地山上に直接造られた1群計3群の遺構が考えられ，第2次調査とあわせて10群におよぶ造営が行われたことが想定された。これらの遺構群を，第2次調査時の分類とあわせて示せば，Tab. 3のとおりである。*

Tab. 3　調査期別遺構分類対照表

第2次調査		第4次調査		
代表遺構	群	群	代表遺構	
—		1	SD 141	
—		2	SB 176	
SD 126		3	SD 126–A	
SD 130	A	4	SD 130	SB 170
SB 112　SB 131	B	5	SB 112	SB 177–A
SB 113	C	6	SB 177–B	SB 113
SB 116	D	7	SB 191	
SA 120	E	8		
SA 121	F	9	SA 233	
SA 109	G	10		(SB 166)

SB 166 は第4次調査時にどの群に属するかの判定ができなかつた。

C　第5次調査

全面調査

第4次調査同様地層観察の畦を残し，調査地東半南部のC地区より全面の掘り下げを開始した。C地区では水田床土直下で，土器・瓦を含む堆積層を検出し，この面で遺構を探求したが，特に取り上げる必要のあるものは発見できなかつた。更にこの層を掘り下げ，下に盛土層Cを検出した。C地区南部ではこの層の下にさらに剝離する2層が認められ，その各々の剝離面をD・E面と仮称した。E面は地山面にあたる。C面では掘立柱建物8棟が発見された。A・B地区ではこのC面からSK 217～226の土壙が掘られており，その北にSD 126の溝があつた。これらの壙の埋土は粘土質であつたため，浸透した水によつて泥化し，この壙に重複する柱穴輪郭の確認は困難を極めた。D面には，SB 205があつたが，この建物の身舎内北よりには，塼を混入した盛土が認められ，この建物の掘りかたはその塼を切断して掘られていた。この他にこの面から始まる遺構はなかつた。なおSB 205がD面に属することを確認したのは地層調査の際であるが，発掘当初も柱穴重複からこの付近で最も古い遺構と認められていた。D面は北に進むにしたがい剝離しにくくなつていた。

地山面（E面）は調査地南部ではよく剝離して検出され，この面でSD 141を発見した。地山面は北のSD 126までは平坦だが，SD 126以北は20 cmほど高くなつていた。またSD 141以北では地山面の剝離はよくなかつた。

Ⅰ地区の発掘では，水田床土直下の盛土層で土器を埋没したSK 234・238を発見し，SK 234を掘りさらえてその下からSA 233・SB 236東側柱の柱穴を発見した。Ⅰ地区も東半部同様C・D・E面と順次削り下げSD 126・SD 141が続くことを確認したが，D・E面の剝離性はC地区ほど顕著でなかつた。Ⅰ地区で発見された遺構は第Ⅲ期の整地に関係する最も新しいもので，それをさかのぼるものはなかつた。したがつてそれ以前には，Ⅰ地区は南北に長い空閑地であつたと考えられ，その位置がほぼ宮域の東西中心に当ることや，後にその東辺にそつて柵が設けられたことからすると，この柵以西は地区を限る道路のような性格をもつていたと思われた。

土壙の調査

遺構実測後土壙を掘り下げて遺物の出土をみたが，そのうち特記すべきものはSK 219出土の木簡で，細片を含め墨書を有するものが41点にのぼつた。SK 219の上層埋土は全く遺物を含まず，土壙を埋没するためのものと考えられ，重複して検出された柱穴はこの土に掘られていた。この埋

＊　第4次調査の分類は「昭和35年平城宮跡第3・4・5次発掘調査概要」（奈文研年報 1961）に用いたものを細分した。すなわちⅤ–5・6，Ⅵ–7，Ⅶ–9・10に当り，第2次調査時の分類と異なる。

土下は檜皮片の散乱する面で，木簡，土器，自然遺物等を含む層があつて地山にいたる。自然遺物中濶葉樹の葉身は緑色のまま検出された。木簡は空気にふれると刻々黒変し，早急な記録が必要となつたので一点毎にただちに現地事務所で写真撮影実測を行つた。この撮影ではモノクロウムフィルムと赤外線フィルムを併用したが，結果には著しい差はなかつた。

木簡のなかに天平宝字6年の紀年銘のあるものが3点あり，諸々の事情をあわせ考えると，このSK 219 の埋没時期はそれをあまり降らないと思われた。また記載事項からこの附近の建物は食物を扱う官衙の一部と推定された。 発見各遺構の造営時期についてはこれまでと同様層序， 重複状況，配置などから判定した。

D 第 6 次 調 査

第6次調査では，6 AAQ 区のほかに夏季には排水不良のため調査不能の 6ABO－J 地区を調査した。J地区はI地区と連なる同一水田であり，この調査は第6次というより第5次の延長としての性格をもち，遺構の出土状況も前回と全く同様であつた。 全面調査

発掘は C・D・E 面と順次掘り下げて行い，西側では床土直下で前回の SK 238 の連続部を検出した。C面では発掘地中央で SD 244 の石敷を発見し，その下から第2・4次調査で発見した SD 130 の延長に当り南縁に玉石を並べた幅 50 cm 程の溝 (SD 243) を発見した。この溝はさらに幅約 4 m の素掘りの溝 (SD 242) と北縁を同じくして重複していた。南端の発掘では，第2次調査で発見した SA 109 の延長部を予想したが， その痕跡すらなく， 最南端で東西 6 m 南北 2 m の溝を発見した。これは SD 106 の東端にあたる。遺構の造営時期については，すべてこれまでの調査で知りえた結果から類推した。

3 調 査 日 誌

第2次発掘調査 昭和34年7月～12月

7・17 器具器材運搬，地区設定。

7・18 鍬入式場整備。

7・20 鍬入式。 終了後ただちに作業開始。 S・T・U・V地区に南北トレンチ， N・O・R・U地区に東西トレンチ各幅 1.5 m をいれる。

7・21 N地区に南北トレンチ，W・Q・S地区に東西トレンチ，W・O 地区東よりに南北トレンチ，各幅 1.5 m をいれる。

7・22 W・O 地区東トレンチ内床土排土，床土下は礫を混じた茶褐色土である。

7・23 W・Q・S地区トレンチの床土下は西半で含礫茶褐色土，東半は砂又は粘土の地山となる。

7・24 Q・R 地区西よりに南北トレンチ。 V地区トレンチ内北部の床土下の含礫茶褐色土で，溝状のおちこみを検出した。西に平行にトレンチをいれ，北端で間をつなぐ。

7・25 Q・R 南北トレンチは床土下の含礫茶褐色土に達する。W・O 地区西よりに南北トレンチをいれる。

7・27 W・O 地区西より南北トレンチは床土下で含礫茶褐色土に達した。O地区北端部で3m程度の範囲の土器を含む土壙 SK 140 を検出し，東西限界探査のため掘り拡げる。V地区北部で東西に走る溝 (SA 109) を確認。

7・28 O地区北部の土壙 SK 140 は東西 4.5 m 南北 6 m ほどで，東に別の土壙 SK 139 があるらしい。V地区北部の SA 109 の南へトレンチを延長。SA 109 から土師器出土。

7・29 O地区北部 SK 140 内にはほぼ完形の状態で多量の土師器が埋没している。W地区南北トレンチ南よりで柱穴 SA 121 を検出し，西へ掘り拡げる。 V地区 SA 109 を西へ追求。 含礫茶褐色土が低下して溝も浅くなる。 6ABO 区の西端を限る南北方向の遺構は認められない。

7・30 V地区 SA 109 の南は約 3 m 程の平坦部で，その南もわずかに溝状にくぼむ。両側に溝を配した土塁状遺構である。以南は含礫茶褐色土が低くさがり，茶褐色土の下は沼土状灰色泥土と

なる。

7・31　トレンチの結果，調査予定地の北東部を除くほぼ全域に，含礫茶褐色土が認められ，それより上の耕床土はブルドーザーによる除去可能と判断，導入した。土地所有者の要望により，N・O地区の耕土排土のみにおわつた。O地区北部SK 140内清掃完了。写真撮影，土器取上げ開始。U地区東西トレンチで，含礫茶褐色土上面に瓦の散布やや多く，状況確認のためトレンチを拡大。

8・1　U地区トレンチ拡張部分を含礫茶褐色土層まで掘りさげる。

8・3　この部分の含礫茶褐色土面には遺構なし。V地区東西溝SA 109内出土の灰釉陶片がO地区北部SK 140内出土土器と接合し，両者が同時期のものと判明。

8・4　W地区南半の調査地を拡大。柱穴が3所東西にならぶ。U地区西へトレンチ拡張。

8・5　U地区トレンチ西拡張部で含礫茶褐色土上面に玉石を配列せる遺構SX 155を検出。N地区南部より床土排土開始。

8・6～7　N地区床土直下の含礫茶褐色土面検索。

8・8　U地区トレンチ含礫茶褐色土上面清掃。

8・10　O地区東南隅から床土の排土を開始。

8・11　O地区北部SK 140内土器取上げ完了。ほとんど土師器で1000個体以上にのぼる。N地区東辺中央南よりに溝状のおちこみを検出。V地区の溝と連続するものか。

8・12　N・O地区床土排土。

8・17　排水溝を掘る。O地区で東西排水溝中に柱穴を検出。含礫茶褐色土下の遺構である。

8・18　N・O地区床土排土。

8・19　N地区中央南よりの溝の南5mほどにさらに2条の溝があるらしい。

8・20　N地区に3条の東西溝を確認。

8・21　N地区含礫茶褐色土上面清掃開始。

8・22　N地区の3条の溝中，最南の溝底より礎石を検出。一層下の黄褐色土に土壙SK 107を穿ち埋没したもの。土器を伴出す。

8・24　N地区の含礫茶褐色土面で南北小孔列SA 111を検出，同面上清掃完了。

8・25　N地区東西溝掘りさげ開始。土器出土。

8・26　O地区床土排土完了，凝灰岩を埋めこんだ土壙SK 137・138検出。含礫茶褐色土面清掃。

8・27　O地区西よりに南北の柱穴列SA 121があるらしい。

8・28　O地区含礫茶褐色土上面を清掃すると各所に床土の落込んだ部分があるが，大部分は柱穴でないらしい。

8・29　O地区含礫茶褐色土面清掃完了。この面では柵列SA 121と土壙SK 137・138・139・140のほかに遺構なし。Q地区東南隅から含礫茶褐色土面の検索開始。

8・31　O地区に幅1mの南北トレンチを2本いれ，含礫茶褐色土下が黄褐色粘土質土となり，その間がよく剝離することを認む。

9・1　前日の所見にもとずき，O地区東南隅より茶褐色土を除き，黄褐色土上面での遺構検出に努める。

9・2　O地区東南部に多数の柱穴を発見。

9・3～5　O地区黄褐色土上面での検索を続行。

9・7　N地区で含礫茶褐色土層を除き始める。

9・8　N地区北西部に南北溝（後にSB 116の雨落溝と判明）あり。南では浅くなって消滅する。O地区中央西よりで東西にならぶ3柱穴SB 135を検出。

9・9　O地区東南部で，西廂付南北棟建物SB 116の存在が確認されたが，桁行間数はなお不明。その南よりに拳大の礫を用いた東西方向の石敷SD 130がある。その南はバラス敷面。N地区中央附近で東西にならぶ柱穴SB 112を検出。

9・10　O地区南端のSD 130はN地区にも連続して検出。O地区SB 116は5間×3間となることが確定。O地区南部に遺構が多いので，R地区のトレンチを南へ拡げる。W地区南部地山上面清掃開始。

9・11　O地区西南部に東西の柱穴列SB 131あり。N地区中央で9日検出した東西柱穴列の北約6mにも柱穴があって，東西棟建物SB 112と推定。その北側柱東よりの3所の柱穴では南に別の柱穴が重複。

9・12　R地区南部では含礫茶褐色土に達するも遺構なく，その下層を検索し始めた。

9・14　Q地区茶褐色土上面の清掃を開始。

9・15　W地区南部で東西3m間隔にならぶ6箇の柱穴を検出。対応する北側柱列を求めて北に掘り拡げる。

9・16　O地区東南隅のSB 116に重複して2列の柵列SA 120・121があり，それがW地区まで南北に長く続くらしい。含礫茶褐色土上で検出された柵列SA 121はその西のものにあたる。柱穴輪郭検出段階で写真撮影。柱穴内の掘りさげ開始。

9・17　W地区で，約6mをおいて並ぶ2列の東西の柱穴列SB 143が確認された。そのさらに北に幅1mほどの東西溝がある。

9・18　R地区南部でも柱穴を検出。

9・19　柱穴の重複によつて，O地区東南部SB 116がSA 120より古いことが判明。O地区中央附近土壙SK 134より土師器出土。

9・21　W地区南部建物SB 143をQ地区北部へ追求し，南側柱列にあたる4柱穴を検出。N地区中央附近SB 112の西妻中央柱を検出し，柱穴の重複でSB 116より古いことを確認。U地区南部の含礫茶褐色土を除き始める。実測準備開始。

9・22　O地区西南部SB 131の西妻中央柱を畦

畔下で検出し，東西棟 5×2 間建物と認定。U地区南部で含礫茶褐色土と下の黄褐色土の境界面で万年通宝，神功開宝銭計13枚を発見。これで含礫茶褐色土を盛土した時期の上限が限定される。

9・23　R～U 地区にかけて東西柱穴列を検出し，東西棟 5×2 間建物 SB 145 と推定。R地区にはなお別な柱穴がある。

9・24～10・5　写真撮影，遺構実測，併行して細部検討を行う。

9・26　午後発掘調査報告会。台風の余波で風雨強く佐紀公民館で説明会のみ行う。

9・28　O地区南西部 SB 131 の南側柱列東より 1・2 柱穴を検出。

9・29　N地区中央で SB 112 の北側柱列と重複した柱穴に対応する東西柱穴列を検出，SB 113。

9・30　SB 113 の西妻中央柱を SB 116 の雨落溝下に検出し，梁間2間桁行2間以上の東西棟建物と判明。

10・1　O地区中央西よりでは約3.5 m をへだてて平行する柱穴列2条を検出。梁間1間東西棟建物か。Q地区南部の茶褐色土を除き始めた。

10・3　Q地区で含礫茶褐色土中に土器埋没土壙 SK 148 と瓦を埋没した南北溝 SD 147 を検出。この盛土層の下には遺構なし。R地区南部を精査して，南北棟 5×2 間建物 SB 146 を検出。

10・5　遺構実測ほぼ完了。土層調査用のトレンチを掘り始める。

10・10　S地区で SD 143 の西妻を追求し，桁行13間で終ることを確認。

10・11　N地区南部のトレンチで現道路下に基壇状築土層 SA 105 があり。その北に黄褐色粘土質土で埋没された東西溝 SD 106 を検出。

10・13　土層実測完了。埋めもどし開始。

12・20　埋めもどし完了し，調査終了。

第4次発掘調査　昭和35年7月～10月

7・11～20　トロッコとベルトコンベーアーを併用して耕土除去。

7・21～25　床土排土。

7・26　L地区南部で，床土下の含礫茶褐色土におおわれた東西の石敷を確認，第2次調査地域南部の石敷の延長部分であろう。

7・27～8・2　床土排土。

8・3　床土排土の段階で各所に柱穴の存在を予想させる盛土の乱れが認められたが，判然とせず。L地区南部とM地区北部から地山面上で，遺構を検索することにした。M地区北部は床土直下が地山で，東西にならぶ各3個の柱穴が2列検出された。これは第2次調査地域北部の東西棟建物 SB 143 とほぼ柱列が通る。L地区西南部は地山がかなり低くなってゆく。

8・4　M地区北部に幅約 70 cm の東西溝あり。SB 143 の雨落溝か。L地区西南部に柱穴らしきものを数ヵ所認めたが，盛土層上面の汚染が著しく，輪郭は不明瞭。

8・5　M地区中央附近で3m間隔で東西にならぶ各3個の柱穴列が，3m おいて南北に2列あり，東西に長い建物（SB 186 北廂）か。

8・6　M地区南寄りに3m間隔で東西に3ヵ所土器のおちこんだ穴が，南北に2列ある（SB 186 南廂）。L地区北東部で東西にならぶ6個の柱穴を検出（SB 170 南側柱列）。L地区は中央附近より西南にかけて地山がさがり，含礫茶褐色の盛土が厚くなる。

8・8　6日にL地区北部で検出した東西柱穴列の北約3m・9m・12m のK地区内に，平行する3列の柱穴を認め，同一建物のものと考えたが，建物規模はなお不明（SB 170）。L地区南西よりに東西にならぶ3個の柱穴が検出された。第2次調査発見の SB 113 の東半部か。

8・9　6・8両日に K・L 地区で平行して発見された4列の柱穴は東西棟 5×4 間建物 SB 170 となることを確認。その身舎内西寄りに小さな柱穴が並ぶ南北棟 3×1 間の構造物 SB 171 を検出。

8・12　K地区中央に東西溝 SD 141 を検出。この溝を横断して南北に2列の柱穴（SB 177 西廂）あり。北方ではM地区北部から続く2列の東西柱穴列が検出され，あわせて6間分が確認された（SB 194）。この東に大きな土壙（SG 180）があるらしい。

8・13　これまでに発見した柱穴内部をすべて20 cm ほど掘りさげる。

8・16　SD 126 のK地区への連続を確認。

8・17　M地区北部からK地区北西部へ続く SB 194 は，東妻中央柱検出により東西棟7×2間の建物であること。その柱穴は前後2回のものが南北にずれて重複し，そのうち北側柱列の新しい柱穴は SD 126 を埋没した土に掘りこまれていることが判明。K地区東半部で南北棟西廂建物 SB 177 を桁行5間分確認したが，南北妻は未検出。

8・18　SB 170 西妻中央柱を検出，東西棟 5×4 間建物と判明。K地区西南部で SB 186 の東妻中央柱を検出。この建物の柱穴は北に新しいものが重複する。K地区中央の土壙 SG 180 は，深さ 80 cm ほどでなお底に達せず。

8・19　K地区西部で SK 180 の埋土に掘りこんだ梁間2間の南北棟建物 SB 191 を検出。

8・20　SB 186 は梁間2間の身舎に南北廂のつく東西棟建物で，その身舎では同規模の新しい建物が少し北にずれて存在することが判明。

8・22　K地区 SB 177 の南妻中央柱を検出。この南に一部重複して存在する SB 170 は，柱穴の重複で，前者より古い時期のものと判明した。また，その西に一部重複する南北棟建物 SB 176 は，

北半部が SG 180 で破壊されていて，規模は未確認。K地区中央の東西溝 SD 141 で，溝と柱穴の重複から，SD 141・SB 176・SB 177 B の順に新しいことが判明。

8・23 K地区の清掃，柱穴の掘りさげを開始。

8・24 K地区中央東よりの SB 176 北妻中央柱を，SD 126 の北で検出。建物は 9×2 間となる。L地区東南部で発掘地域外に南側柱列がある東西棟 5×2 間建物 SB 166 と，この附近から北へ延びる小柱穴列 SB 167 を2列検出。この小柱穴西列中央附近で，方5mほどの土壙を発見したが，材木が埋没土中に突出しており，井戸と推定される。

8・25 SB 186 はM地区を精査し桁行6間まで確認したが，まだ西妻中央柱を検出せず。第2次調査で西半部を発掘した SB 112 の東妻中央柱を検出。これで桁行7間と確定。その北に一部重複する SB 113 は桁行6間で柱穴が終るが，西妻中央柱を欠く。

8・26 M地区中央で SD 141 の西延長部分を検出したが，西よりで次第に浅くなり消失する。

8・27 写真撮影開始。午後発掘調査報告会。来会者約160人。

8・28 井戸掘りさげ開始。

8・29 井戸は4隅に柱を立て横木を通し，その外に側板をいれたものが2重にあるらしい。底部の堆積泥土中から黒色土器等検出。

8・30～9・2 実測準備。

9・3～10 遺構実測。

9・6 井戸で4隅の柱の外に，幅 30 cm ほどの厚板を井籠組にした井戸枠を確認。古い井籠組枠の上部をこわして，柱貫組式の新しい井戸枠を内部に造ったものと推定。

9・7 新しい井戸枠を取上げたが，下に青灰色の堆積泥土があり，それをさらえた結果，当初の井戸は下部3段分の枠を残し，底は礫を敷いたものであることを確認。当初の井戸からの出土品は全くなかった。湧水が著しい。

9・10 細部の再検討。SB 186 の西妻中央柱を畦畔下で検出。

9・11 井戸枠引上げ。枠材の実測・写真撮影。全域埋めもどし開始。

10・20 埋めもどし完了し，調査終了。

第5次発掘調査 昭和35年11月～36年3月

11・21 トロッコ線路組立。排水溝開鑿。

11・22～30 耕土排土。

12・1～2 地区設定。

12・3 耕土排土完了。床土排土と併行して遺構検出開始。C地区東南部で床土直下に土器を含む堆積層検出。旧地表か。

12・5 C地区東南部床土排土し，南北3列の柱穴を検出。

12・6 C地区東南部で床土下地山までに土層を2層検出。各土層の境界は砂が溜り，明瞭に上下の土層が剝離する。各境界面を C・D・E 面と仮称。E面は地山面にあたる。

12・7 C地区床土排土ほぼ完了。全面に3層の旧地表があるらしい。西南部に柱穴あり。

12・8 C地区西南部では梁間2間の南北棟建物 SB 206 の北妻1間分確認。南の未調査地域に主体部があるらしい。他に柱穴の重複でより古いことの判明する2列の平行する南北柱穴列（SB 205）あり。

12・9 C地区内で SB 206 の北約 6 m に南妻のある南北棟建物 SB 209 を桁行の2間，2列の南北柱穴列 SB 205 を5間検出。この2列の掘りかた列間でD面上の盛土中に塼を検出。原位置でなく，盛土に混じて置いたもの。C地区北部 4 m ほどの部分はE面（地山面）の剝離不良。

12・10 C地区東部の南北の3列の柱穴が，各4ヵ所2列の古いもの（SB 200）と1列5柱穴の新しいもの（SB 201）からなることを確認。

12・11 B地区床土排土。

12・12 早朝藤田所長逝去。雨。現場作業中止。

12・13～14 床土排土。

12・16 C地区西南部で，E面から始まる幅約1 m の東西溝 SD 141 を検出。I地区南部より遺構検出開始。床土直下に土器を埋没した土壙 SK 234 を検出。

12・18 SD 141 を東端まで検出。D面形成時盛土で埋没されている。SB 205・209 の柱穴はその埋没土を切って掘られていた。B地区西部で SB 205・209 のものほかに，D面から始まるかとみられる大土壙SK 219・222・223や柱穴（SB 211）を検出。I地区の SK 234 は北へ連続し，その東に3柱穴（SA 233）を南北に検出。

12・19 B地区に主体部のある建物 SB 211 は東西棟の身舎に南廂のつくもので，廂柱穴には浅くて小礫石を持つものがある。桁行間数不明。C地区から続く SB 209 は桁行6間までB地区で検出。SB 205 は妻中央柱穴を検出せず。

12・20 故藤田所長の研究所葬をおこなう。現場作業中止。

12・21 SB 211 は桁行5間と確定。SB 209 の北妻中央柱をA地区西部で検出，南北棟 7×2 間と確定。

12・22 B地区東北部に柱穴（SB 212・213）検出。A地区中央で巾約1mの溝を検出。溝以北は遺構なく地山高し。I地区東半の SK 234・SA 233 を北端まで追求。I地区北部でA地区の東西溝の連続部検出。

12・23 A地区で SB 211 の北廂柱穴を検出。中央の東西溝を東端まで追求，東端部で柱穴を検出

し，B地区北東部の柱穴と共に梁間2間のおそらく東西棟の2棟の建物 SB 212・213 の西妻部分になると推定され，C地区東部の SB 220・221 と妻通りが一致す。I地区北の SD 126 は西端まで検出された。第4次調査のK地区北部の溝に続くものであろう。なお，溝底は上下2層ある。

12・26　I地区中央部でE面に掘りこまれた東西溝 SD 141 を検出。C地区および第4次調査K地区中央の東西溝に連なる。SK 234 下に東側柱列のある南北棟 5×2 間建物 SB 236 を検出。西南部道路わきに土器を埋没した土壙 SK 238 を検出。SK 234 出土土器には切高台つき皿形緑釉陶器が混入している。

12・27　調査全域E面にいたる。発掘を1月11日まで中断。

1・11～14　排水，清掃作業。

1・16～26　写真撮影。遺構実測。土層実測。

1・23　土層検討により，E面では SD 141，D面では SD 116・SB 205 があり，SK 219 を含むその他の遺構はC面乃至それ以上から始まるものであることを確認。埋めもどし開始。

1・23～2・1　B地区西南部土壙 SK 219 を掘りさげる。

1・24　SK 219 内では遺物を含まない埋土（漸次下ほど灰色にかわる赤褐色粘土質土）があり，その下に土器・木製品・自然遺物を含む灰色砂質土(厚さ 20～30 cm）と泥土（厚さ約 10 cm）がある。埋土と灰色砂質土の間に檜皮がかなり多量に存在し，灰色砂質土から木簡1を検出す。

1・29　天平宝字6年銘の木簡出土。

2・1　SK 219 を掘り終った。多量の土器・自然遺物と共に紀年銘をもつ4枚を含む木簡41枚を検出し，この地区の性格および年代決定に重要な資料を得ることができた。

2・2～3　B地区の他の土壙（SK 217・218・220・221・222・223）を掘りさげ，少量の土器類の出土をみた。

3・10　埋めもどしを完了して現場作業を終る。

第6次（6ABO区）発掘調査

昭和36年4月～6月

4・1～4・25　耕土排土，地区設定。

4・26～4・29　床土排土。

5・1　遺構検出を始め，北部で掘立柱検出す。第5次調査地域で検出したC・D・E の各面はほぼJ地区にも続いているらしい。北部の掘立柱は南北棟 5×2 間建物 SB 246 になることが判明。東道路ぎわに土器を埋没する土壙が南北にあるらしい。第5次発掘I地区西南隅の SK 238 の南への連続であろう。

5・6　南西部で東西にのびる溝 SD 239 を検出C面形成時の盛土にはおおわれているらしい。

5・8　SD 239 は東へのびず約 6 m で終る。

5・9　南⅓の地域をE面までさげる。

5・11　中央南よりに幅約4 m の東西溝 SD 242 あり。この溝を埋め，北辺にそって新たに砌石のある幅約 50 cm の溝（SD 243）が設けられているらしい。この SD 243 は第2・第4次発掘の SA 130 石敷溝の東延長上にあたる。この部分のみ構造がかわるのか。

5・14　SD 243 は東へのびる。東ではこの溝を埋没し，その上に石敷溝とバラス敷（SX 244）が設けられている。

5・15　全域E面に達する。

5・17～18　遺構実測。

5・20～6・15　埋めもどし。調査完了。